



TITLE:

あいさつ (河上肇記念講演会)

AUTHOR(S):

田中, 秀夫

CITATION:

田中, 秀夫. あいさつ (河上肇記念講演会). 経済論叢 2005, 176(5-6): 580-582

ISSUE DATE:

2005-12

URL:

<https://doi.org/10.14989/66345>

RIGHT:

中国における政治経済学者の受難と経済改革への影響、中国と日本の思想のなかのマルチチュードの像について論じた。討論においては、東アジアにおける思想遺産の意義、政治経済学の市場経済に対する態度、社会主義をどう理解するかなどが、フロアからの発言も交えて議論された。

記念講演会の部では、はじめに中野一新本学名誉教授（河上肇記念会代表世話人）が「河上肇と京都大学」について語られ、その後、住谷一彦立教大学名誉教授（東京河上会代表）が「河上肇と比較経済思想——河上肇におけるヴェーバー的問題」と題して話された。この講演は、河上肇の「人と思想」を、「理念が転軸手となり、利害の力学が軌道を推し進める」というマックス・ヴェーバーの宗教社会学の構図から理解して、河上肇における「宗教的真理」の問題に解決を与えようとするものであった。住谷氏は、河上肇の探求を各段階をおってたどられ、表面における変化にもかかわらず一貫したエートスが見られると論じられた。なお、この講演会では、山口河上会の加藤碩代表からのあいさつも受けることができ、また河上家ゆかりの方も参加された。

あ い さ つ

田 中 秀 夫

皆様本日は多数ご来場くださりましてありがとうございます。研究科長・経済学部長の西村が所用で参ることができませんので代わってご挨拶申し上げます。

本日の講演会は河上肇記念会、東京河上会と山口・京都など各地の河上会、同窓会などの協力を得て、経済学部 COE プログラムとして開催されます。関係者に厚くお礼申し上げたいと思います。

先ほど上海センターも加わりまして記念シンポジウムがもたれました。こうして皆様のご支援を得て河上肇記念講演が開催できることは、経済学研究科・経済学部にとって意義深いものであります。先だっては高田保馬記念講演会を

開催し、スタンフォード大学から雨宮教授をお招きして「古典ギリシアの経済思想」について含蓄のある講演をしていただきました。

本日はまず本学名誉教授で河上記念会の代表をしておられます中野先生にご挨拶いただき、その後八木先生からご紹介がありましたように立教大学名誉教授の住谷先生に「河上肇と比較経済思想」というテーマでご講演をいただきます。住谷先生は河上についての専門的なご業績をお持ちの方でもあり、興味深いお話が伺えるのではないかと楽しみにしている次第であります。

ご承知のように河上肇は戦前の日本の嵐の時代に社会的使命感、倫理的責任感をもって経済学に打ち込んだ先駆者でありました。今日のような市民的自由が未確立であった権威主義的国家の支配下にあって、河上のような国立大学の教授たちは社会の学問に携わるうえで学問的良心に直面することを余儀なくされたわけではありますが、不幸にして京都大学は時代の先駆者である偉大な思想家・河上を学園から追放することを強いられました。

大学が河上を守れなかったという歴史的事実は重いものがあります。言論の自由が失われていた時代ですから、大学の自治、外的権力からの大学の独立は脆いものでありました。

今日大学は大きな変革の渦中にあります。河上ならどのような思想を抱きどのような方向を目指しただろうかと思うことがあります。私は『貧乏物語』や『経済学大綱』よりも『祖国を顧みて』のほうが好きなのでありますが、私にとって河上は、学問の自由、大学の自治を考える時に忘れることのできない人です。

多様な思想、様々な考え方、自由な研究と教育が今日どれほど実行されているでしょうか。日本はかつてない豊かな時代を迎えています、教員も学生も大学で何をすることが問われていると思います。また、民間からかつてないほどのご支援を得るようになっております。従って大学は社会に対してコンプライアンスと説明責任を負っており、そのことは外部評価などとしてかつてないほど意識される時代となってまいりました。それは適切なことであろうと思いま

す。

しかし申すまでもないことですが、大学は外部の権力や勢力の介入を許してはなりません。大学は自治を守り、多様な独創的な研究としっかりした教育を遂行することを通して社会に寄与することを目指さなければならないと思います。そのためには自由と余暇が不可欠であります。学者のことをスカラーと申しますけれども、それは余暇を持つ人という意味です。もちろん私たちは優雅に暇を楽しんで怠けたいなどとは思っておりません。

それはともかく学園の自由は社会における言論出版の自由、市民的自由によってしか支えられないということは申すまでもないことであります。他方、あまりにも今は多忙で、自由な研究がどこまでできているのか、自戒しなければならぬことも事実であります。COE プログラムがどのような成果を上げるのかということも社会は注目をしているように思います。

大学で仕事をしております私には、河上肇はこのようなことを考えさせる思想家でありました。ここにお集まりくださいました皆様にとって河上肇はどのようなことを考えさせる思想家でしょうか。今はもちろん皆様のご意見を伺うことは叶いませんけれども、最後までこの記念すべき講演、中野先生と住谷先生のお話をご堪能いただきますようお願いいたします。簡単ですが西村研究科長に代わってのご挨拶といたします。

河上肇記念会山口懇話会から

加藤 碩ひろし

ご紹介いただきました河上肇記念会山口懇話会（略称山口河上会）の代表代行の加藤碩ひろしと申します。代行となっておりますのは、実は初代の代表が立命館大学の教壇に立っておられました細迫朝夫ほそざかともお先生でした。先生が郷里の山口県にお帰りになって、山口懇話会がスタートしたんですけれども、いまはお亡くなりになりました。その後の代表の方もつい1週間ちょっと前にお亡くなりになり